

広島都市学園大学の地域子育て支援拠点事業に関する一考察

— 「いーぐる」利用者への第6回質問紙調査から —

○富田 道子・田丸 尚美・深澤 悦子・國清 あやか
須崎 朝子・瀧口 美絵・石橋 由美

広島都市学園大学子ども教育学部

要 旨

オープンスペースを利用している保護者を対象に、第6回質問紙調査を実施し、以下の結果を得た。

第一に、主な利用保護者の年代は30代であるが、20代の利用者が増えていることも明らかとなった。利用保護者のほとんどが核家族世帯であり、「何かあった時にすぐに頼れる(近居している)親族がいない」の回答割合は前回調査結果と比較してさらに上昇している。

第二に、オープンスペースを知ったきっかけは、「友人・知人からの紹介」の回答割合がもっとも高いが、「インターネット」も高く、前回調査結果と比較して倍増していることが明らかとなった。

第三に、オープンスペースの利用理由として多く挙げられた項目は、「子どもが喜ぶから」の回答割合がもっとも高いが、次に挙げたのは「ストレス解消やリフレッシュできるから」であった。

第四に、子どもについての気がかり・心配ごとの第1位は「食事」であり、次いで「発達面」「からだの成長」、「性格・行動面」「トイレトレーニング」の割合が高いことが明らかとなった。

第五に、オープンスペースに対しては、9割以上の利用者が「満足」と回答した。

第六に、利用者自身については、「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまった」の回答割合がもっとも高く、次いで「子どもにイラっとすることがある」が高いことがわかった。さらに、利用保護者自身についての回答と「頼れる親族の有無」との関連をみたところ、頼れる親族の有無にかかわらず、利用保護者が悩みながら子育てをしていることが窺えた。

キーワード：地域子育て支援拠点事業、大学、オープンスペース、利用保護者、乳幼児

1 はじめに

現代社会において、親同士が日常的に交流できる場や、子どもが群れて遊べるような場を見出すことは難しくなってきた。育児不安や孤立した子育てが課題となる中、親子が他者と出会い交流できる仕組みを意図的に再生することが求められている。地域子育て支援拠点事業には、子ども同士、親同士、さらには地域の様々な人たちと子育て家庭をつなぐ「架け橋」としての働きが期待される。

2014年7月に事業を開始した広島都市学園大学内にある「公募型常設オープンスペース」(以下、オープンスペースと称す)も、まもなく開設5周年を迎える。これまで単に親子

が集う場を提供するだけでなく、子育てに関する相談や情報提供などを行い、さまざまな企画を開催し親子の交流を通して、親同士の支えあいや子ども同士の育ちあいを促すような働きかけを行ってきた。地域全体で子育てを支える拠点としての機能を担うために、さらに利用者の多様なニーズに合わせたより質の高い事業をすすめる手掛かりとして、オープンスペースにおける利用者への質問紙調査結果を考察する。

2 研究方法

2.1 質問紙調査対象者・時期・調査方法・倫理的配慮

質問紙調査の対象者は、オープンスペースを利用している保護者であり、調査時期は2018年9月3日～10月5日（104名、回収率100%）であった。

調査方法は、オープンスペースを利用する保護者に調査依頼状と質問紙を手渡し、調査の目的とともに、①調査依頼状の内容に目を通した上で、フェイスシートの「調査に同意する・しない」のいずれかに印す、②「調査に同意する」者は各調査項目に回答後、また、「調査に同意しない」者は未記入のまま、質問紙を所定の場所に設置した箱に提出する、という手順を説明した。なお、質問紙を回収の際、子育てアドバイザーや他の利用者へ回答内容がわからない場所に箱を設置した。

質問調査項目については、前回のものを修正した。まず、「いーぐるを知ったきっかけ」の中の選択肢「口コミ」を「友人・知人からの紹介」に修正した。昨年度までの調査結果から、利用保護者は「その他」の項目で友人や知人から紹介されたと回答しており、「口コミ」の文言に対する解釈について、利用保護者と調査者との間に微妙な差異があることがわかったからである。次に、「いーぐるを利用する理由」の中の選択肢「お帰りの会があるから」を「一緒に遊ぼう会があるから」に修正した。その理由は、子育てアドバイザーが協議して、利用者によりわかりやすい名称をと検討し変更したからである。さらに、「子どもについての気がかり・心配ごと」のなかの選択肢を、月に1回開催している子育てなんでも相談における利用保護者の悩みの実態に合わせて修正した。具体的には、「運動機能」を「発達面」に、「断乳時期」を「卒乳」に、「子どもがかむ・泣く・怒る」を「性格・行動面」に、「教育・習い事」を「早期教育」に修正した。

なお、本調査は広島都市学園大学倫理審査委員会の承認を得ている。

2.2 分析方法

質問紙調査における回答は、SPSS Ver. 25を使用して基礎統計量と回答の割合で集計し、全体的な傾向を把握した。

3 結果と考察

3.1 属性・家庭環境

オープンスペース利用者に関する属性と家庭環境は次の通りである。

まず「これまでの利用回数」について、「初めて利用した」が9名（8.7%）,「2～4回」が18名（17.3%）,「5回以上」が77名（74.0%）であることが明らかとなり、利用保護者の約7割がオープンスペースをよく利用していることがわかった。

利用保護者の年齢は30代がもっとも多い（60.6%）が、20代利用保護者も増加傾向にある（表1）。また、利用する子どもの詳細をみると、第1子のみ利用は60.6%であり、次いで第1子と第2子利用の21.2%であった（表2）。家庭環境は、利用者のほとんどが核家族であり、そのうち32.7%以上が「何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族がいない」という結果であった（表3）。ひとり親家庭（3名）の場合は、全員が「頼れる親族がいる」と回答している。

表1 保護者の年代

調査実施時期	10代	20代	30代	40代	計
	人数（%）	人数（%）	人数（%）	人数（%）	
第1回（2014.7～9）	0（0.0）	18（15.1）	89（74.8）	12（10.1）	119名（100%）
第2回（2015.1～2）	0（0.0）	21（22.3）	69（73.4）	4（4.3）	94名（100%）
第3回（2015.8～9）	1（1.0）	28（26.9）	65（62.5）	10（9.6）	104名（100%）
第4回（2016.9～10）	0（0.0）	29（27.1）	70（65.4）	8（7.5）	107名（100%）
第5回（2017.9～10）	0（0.0）	27（25.0）	70（64.8）	11（10.2）	108名（100%）
第6回（2018.9～10）	0（0.0）	32（30.8）	63（60.6）	9（8.6）	104名（100%）

表2 利用者（子ども）の出生順位

利用者	人数（%）	
第1子のみ	63	60.6
第1子と第2子	22	21.2
第2子のみ	11	10.6
第2子と第3子	1	1.0
第3子のみ	4	6.6
計	104名（100%）	

表3 家族構成と頼れる人との関連

	家族構成	頼れる親族	
		頼れる人あり 人数（%）	頼れる人なし 人数（%）
第5回	パートナーと同居	80（75.0）	27（25.0）
	ひとり親家庭	1（100）	0（0.0）
第6回	パートナーと同居	66（67.3）	32（32.7）
	パートナー及び 義父母と同居	3（100）	0（0.0）
	ひとり親家庭	3（100）	0（0.0）

3.2 オープンスペースを知ったきっかけ

オープンスペース「いーぐる」を知ったきっかけを尋ねた結果は、表4の通りである。これまでの調査結果と同様に「友人・知人からの紹介」の割合がもっとも高く、次いで「インターネット」,「区役所や公民館」となった。

表4 オープンスペースを知ったきっかけ（複数回答）

項 目	人数（％）
友人・知人からの紹介	39 (37.5)
大学のチラシや看板を見て	8 (7.7)
インターネット	32 (30.8)
子育て情報誌	2 (1.9)
区役所や公民館	30 (28.8)
市の広報紙	5 (4.8)
その他	6 (5.8)

その他／『イマなま（テレビ番組）』を見て
助産師さんに教えてもらって
兄弟が大学に通っているため

3.3 オープンスペースの利用理由

オープンスペースの利用理由は、「最も当てはまる」、「当てはまる」、「当てはまらない」の3件法で回答するものとした。この平均値は表5の通りである。

多く挙げられた項目に着目すると、「子どもが喜ぶから（2.84）」、「ストレス解消やリフレッシュできるから（2.70）」、「親子でいろいろなおもちゃで遊べるから（2.67）」、「設備や遊具が充実しているから（2.66）」、「同じような年齢の子どもとの交流ができるから（2.65）」、「あたたかく迎えられ、ほっと心がなごむから（2.56）」、「子どもを集団になれさせるため（2.55）」と、これまでの調査と同じような傾向であった。

表5 オープンスペース利用理由

項 目	第6回調査				第5回
	当てはまらない（％）	当てはまる（％）	最も当てはまる（％）	3件法 平均値	3件法 平均値
自分の友人を作ったり、友人と交流	26.0	51.9	22.1	1.96	2.01
悩みを気軽に話せる場がほしかった	9.60	59.6	30.8	2.21	2.15
相談に対してアドバイスがもらえる	15.4	61.5	23.1	2.08	2.05
いーぐる通信・SNSから情報が得られる	46.2	47.1	6.7	1.61	1.56
子どもが喜ぶから	0.0	16.3	83.7	2.84	2.80
同じような年齢の子どもとの交流	1.9	30.8	67.3	2.65	2.65
子どもを集団になれさせるため	3.8	37.5	58.7	2.55	2.56
育児休暇後の復職に向けて、子どもの保育所入所の準備として	70.2	18.3	11.5	1.41	1.44
幼稚園就園の準備として	68.3	23.1	8.7	1.40	1.55
幼稚園選びのための情報を得る	66.3	26.9	6.7	1.40	2.24
ストレス解消やリフレッシュ	1.0	27.9	71.1	2.70	2.62
設備や遊具が充実している	0.0	33.7	66.3	2.66	2.61
親子で絵本を楽しめる	11.5	60.6	27.9	2.16	2.18
親子でいろいろなおもちゃで遊べる	0.0	32.7	67.3	2.67	2.67
親子で砂遊びができる	26.9	41.3	31.7	2.05	2.27
季節感のある室内装飾を楽しめる	26	58.7	15.4	1.89	2.04
身体計測ができる	14.4	59.6	26.0	2.12	2.18
子育て相談がある	9.6	51	39.4	2.30	2.31
講座や講習会がある	25.0	47.1	27.9	2.03	2.01
一緒に遊ぶういがあるから	31.7	51.0	17.3	1.86	1.92
あたたかく迎えられ、ほっと心がなごむ	1.0	42.3	56.7	2.56	2.52
安心して自分がトイレに行ったり、下の子の授乳ができる	18.3	47.1	34.6	2.16	2.36
安心できる環境だから	5.8	37.5	56.7	2.50	2.66

3.4 子どもについての気がかり・心配ごと

子どもについての気がかり・心配ごとを尋ねた結果は、図1の通りである。気がかり・心配ごとに「食事」を挙げた者は51.9%と最も高かった。次いで「発達面」が41.3%、「からだの成長」と「性格行動面」が36.5%、「トイレトレーニング」が35.6%であった。

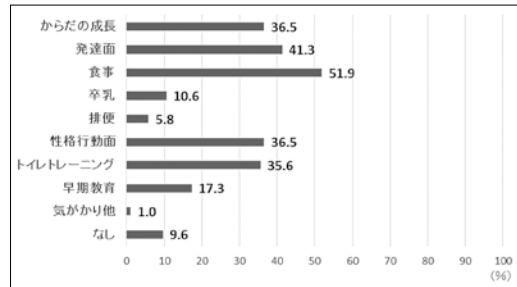


図1 気がかり・心配ごと（複数回答）

さらに、気がかり・心配ごととして「食事」を挙げた利用者にその詳細を

尋ねたところ、もっとも多かったのは「好き嫌いがある（40.7%）」で、次いで「その他（37.0%）」、「かまない（24.1%）」、「食べる量が少ない（22.2%）」という回答が得られた。

3.5 食事に関する気がかり・心配ごと―「その他」の自由記述

子どもの食事についての気がかり・心配ごとの第2位である「その他」に記述された内容には、「食事中にじっとしていない」、「食事の時にスプーンで遊ぶ」など『食べ方』に関するもの、「野菜をなかなか食べてくれない」など『嗜好』に関するもの、「情報がありすぎて何が正しいのかわからない」など『情報』に関するものなどがあった（表6）。

表6 食に関する気がかり・心配ごと「その他」自由記述

分類	記述例
食べ方	食事中に動き出す。じっとして食べられない。
	夜はよく食べるが朝は食べない。食事の時にスプーンで遊ぶ。
	自分でスプーンを使って食べない。
	お腹が満たされてくると食べ物を投げる。
	大きいものでも口の中に全部入れて食べようとしてしまう。
嗜好	野菜をなかなか食べてくれない。
	牛乳やフォローアップミルクばかり好んで飲む。食事をしっかり食べられるようにしたい。
	何でも食べてくれていたのに食べなくなった。このまま食べなくなってしまうのではないか。
食事の内容	月齢に合わせた食事の与え方。栄養面などわからない。
	離乳食の進め方。食べる量が分からない。
	固さや大きさなどの進み方がよく分からない。
調理技術	レパートリーが少ない。マンネリ化している。
情報	皆がどんなものを食べているのかが知りたい。
	情報がありすぎて、何が正しいのか分からない。色々言ってくる人がいるが何を取り入れたらいいのか分からない。
	上の子もいて時短でできるものを知りたい。

3.6 「子どもについての気がかり・心配ごと」と「すぐに頼れる（近居している）親族」の有無との関係

3.1において、利用保護者と子どもがパートナー及び義父母との同居家庭、あるいはひとり親家庭の場合、いざというときに頼れる親族がいることがわかったが、パートナーと同居している家庭においては30%以上の家庭に頼れる親族がないことがわかった。この結果を受けて、頼れる親族がいる家庭では「子どもについての気がかり・心配ごと」が少ないのではないかという仮説のもと、クロス集計を試みた。その結果を表7に示した。全体的には「頼れる親族なし」のほうが気がかり・心配ごとの割合が高い傾向にあるが、「頼れる親族あり」の家庭においても気がかり・心配ごとがあることが明らかとなった。

表7 「子どもについての気がかり・心配ごと」と「すぐに頼れる（近居している）親族」の有無との関係（複数回答）

	からだ	発達面	食事	卒乳	排便	性格行動面	トイレトレーニング	早期教育	その他	なし	
頼れる親族あり数(%)	30 (41.7%)	25 (34.7%)	33 (45.8%)	9 (12.5%)	4 (5.6%)	26 (36.1%)	21 (29.2%)	11 (15.3%)	0 (0.0%)	9 (12.5%)	(72名)
頼れる親族なし数(%)	8 (25.0%)	18 (56.3%)	21 (65.6%)	2 (6.3%)	2 (6.3%)	12 (37.5%)	16 (50.0%)	7 (21.9%)	1 (3.1%)	1 (3.1%)	(32名)

3.7 オープンスペース満足度

オープンスペースについて満足しているかどうかを尋ねたところ、「満足」が99名(95.2%),「ふつう」が5名(4.8%)となり、ほとんどの利用者が満足と回答したことがわかった。

3.8 利用保護者自身について

利用保護者自身の、子どもとの関わり方について尋ねた結果は表8の通りである。ただし、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」の項目は、第1子のみ

表8 利用保護者自身について

	よくある 人数 (%)	時々ある 人数 (%)	たまにある 人数 (%)	ない 人数 (%)
ダメと制止する言葉が多くなる	29 (27.9)	35 (33.7)	31 (29.8)	9 (8.7)
外出したいが疲れてしまい出られない	3 (2.9)	23 (22.1)	36 (34.6)	42 (40.4)
上の子を我慢させてしまう (第一子のみ家庭除く)	13 (12.5)	10 (9.6)	9 (8.7)	6 (5.8)
子どもにイラッとする事がある	21 (20.2)	36 (34.6)	36 (34.6)	11 (10.6)
手をあげて、後悔してしまう事がある	1 (1.0)	8 (7.7)	21 (20.2)	74 (71.2)

家庭には答えられないため、その場合は「ない」にチェックするよう指示した。ここでは、本項目に該当する38名の回答割合を示した。

この「よくある」「時々ある」の回答割合に注目すると、「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまう」が61.6%でもっとも高く、次いで「子どもにイラッとするところがある」が54.8%、「子どもを連れて外出したいと思うが、疲れてしまうためできない」が25.0%、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」が22.1%、「子どもに手をあげて後悔することがある」が8.7%であった。

3.9 自由記述から

質問紙最後の自由記述には、今までの調査と同様に多くの感想が寄せられた。

具体的には、「先生方がとても優しく温かいので居心地がいいです」「この空気感が1番好き。アットホームなままであってほしいです。学生と交流できるのも良いです」「アドバイザーの皆さんもとても親切で、初めての子育ての不安も解消できて感謝しています」「とても雰囲気がよく、安心して利用できるととても素敵な場所です。お母さん方が(他人の)子どもを温かい目で見ているのでとてもいいなと思う」「子どもの遊び場としてだけでなく、私自身の心のよりどころにもなっています。いーぐるがこれからもずっと、沢山のママさんの助けになりますように」などがあった。

3.10 考察

オープンスペースの認知度は年々高まり、新規利用者が増えている。その背景には、「いーぐるをどのようにお知りになりましたか」の回答から、オープンスペース利用者の情報発信力(口コミ)のほかにインターネットの力があることが推察される。とりわけ、インターネットの回答割合は昨年度(第5回調査)と比べ倍増していることが明らかとなった。

属性や家庭環境について、まず利用保護者の年代をみると、その多くが30代であることはこれまでの調査結果と変わらないが、本調査で明らかになった特徴は、20代の利用保護者が30%を超えており、この割合は調査を開始した2014年から倍増している点にある。

次に、利用子どもの出生順位に注目すると、「第1子のみ」という家庭は60.6%と昨年(第5回調査)の結果とほぼ同じであったが、次に多かったのは「第1子と第2子」の21.2%であった。昨年の第5回調査では第2子のみが同じ割合であり、その際の考察として『第1子いーぐる卒業』の保護者がある程度の間隔をあけて第2子を出産し再来している可能性を述べたが、第6回調査の場合、生後数か月の乳児の利用が増えているという子育てアドバイザーの報告によれば、利用保護者になるべく間を空けずに第2子を出産し、密室での子育てから解放されるために本オープンスペースを利用していることが推察される。

さらに、利用保護者のほとんどがパートナーと同居しており、核家族世帯の割合が非常に高いという傾向はこれまでの調査と変わらないが、パートナーと同居している利用保護

者の「何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族がいない」の回答割合は、第5回調査の25.0%から32.7%とさらに上昇した。つまり、利用保護者の1/3の者は、気兼ねなく頼れる人、相談できる人を求めて本オープンスペースに来訪していることが考えられる。

オープンスペース利用の主な理由の上位項目には、過去の調査と同じものが挙げた。しかし、回答平均値の順位に着目すると、第1位「子どもが喜ぶから（2.84）」に次いで割合が高かったのは、第5回調査の場合「親子でいろいろなおもちゃで遊べるから（2.67）」であったのに対し、本調査においては「ストレス解消やリフレッシュ（2.70）」が第2位となった。自身の心の開放を求めて本オープンスペースに来訪する利用保護者の増加が推察される。このことは自由記述内容にも現れている。第5回調査までは、開室時間の延長や各種企画実施の要望、保育環境整備などが比較的多かったように思われるが、本調査における記述内容の特徴は、「居心地がいい」、「ここの空気感」、「アットホーム」、「ほっとできる」、「安心」、「温かい目」、「心のよりどころ」、「子どもも大好きな場所」のように、利用保護者自身の気持ちが多く記述されている点にある。さらに、子育てアドバイザーからは、いーぐる内で保護者同士がつながり、友だちづくりをしている姿、お弁当を持参し一緒に昼食をとる中で情報交換をしている姿も報告されている。恐らく、本オープンスペースを利用することで、家事と育児に縛られることなく、子どもとの時間や他の保護者との時間を楽しむことができるからだろうと思われる。

角張・小池（2013）は、子育て支援の場を利用する母親について、「親子の居場所」と認識しながら、そこで「一人の人としての自分」という感覚を取り戻したと回答した者が1割いたことを報告し、「母親」という1つの役目のみではなく、「私」として「居場所」に受け入れられていると感じている現れとまとめている。本オープンスペースもそのような役割が少しは果たせているのではないかとと思われる。

子どもについての気がかり・心配ごとについて見てみると、第1位は「食事（51.9%）」であり、それに続く「発達面（41.3%）」の割合の高さは予想以上であった。昨年の記述割合とほぼ変わらない「からだの成長（36.5%）」、「性格・行動面（36.5%）」、「トイレトレーニング（35.6%）」も含め、食のなんでも相談や食の講習会、子育てなんでも相談や保育アドバイザーの日常的な支援が一層必要であることを確認した。

次に、気がかり・心配ごととして「食事」を挙げた利用保護者にその詳細を尋ねたところ、もっとも多かったのは「好き嫌いがある」であり、次いで高い割合であったのは「食事中にじっとしていない」、「食事の時にスプーンで遊ぶ」、「野菜をなかなか食べてくれない」など「その他」の項目であった。木曜日の「食のなんでも相談」で利用保護者から聞く悩みも今回の調査結果と同様に、離乳食を食べない、偏食が著しい、今まで食べられたものが食べられなくなったなどであるが、じっくり話を聞いてみると、離乳食の調理方法、食べ方・食べさせ方、家族との関係や生活リズム、利用保護者の“離乳食の内容・段階を進めたい”という気持ちの背景にある、例えば職場復帰の準備など子どもに無意識に働く

心理的影響も含め、原因が推測されるものが多いため、悩みがその場で軽減するものもある。また、「その他」の記述の中の多くの情報や助言に振り回されて困惑している様子から、産後の検診時に行われる行政の離乳食指導だけで終わることなく、繰り返し学ぶ機会が必要であることを認識した。本オープンスペースにおいても、引き続き相談日に声をかけやすい雰囲気をつくりながら利用者支援をしていきたい。

さらに、「子どもについての気がかり・心配ごと」と「すぐに頼れる（近居している）親族」の有無をクロス集計してみたところ、「すぐに頼れる（近居している）親族」の有無にかかわらず、多くの利用保護者が何らかの悩みをもっていることがわかった。

利用保護者自身について尋ねたところ、子どもに対し「よくある」「時々ある」と回答した割合は、「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまう」がもっとも高く、次いで「子どもにイラっとすることがある」が高いことがわかった。さらに、利用保護者自身についての回答と「頼れる親族の有無」との関連をみたところ、「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまう」の項目は、「頼れる親族あり（以下、「あり」と称す）」が61.1%、「なし」が62.5%、「下の子が生まれ、上の子を我慢させてしまうことがある」の項目は「あり」が63.3%、「なし」が50%、「子どもにイラっとすることがある」の項目は「あり」が54.1%、「なし」が56.3%と、いずれも割合が高かった。第5回調査では、「頼れる親族あり」が「頼れる親族なし」より回答割合が高かったが、本調査では頼れる親族の有無に関わらず、多くの利用保護者がさまざまな葛藤を抱えながら子育てを担っている様子が垣間見えた。

4 まとめと今後の課題

オープンスペースを利用している保護者を対象に第6回質問紙調査を実施し、以下の結果を得た。

第一に、主な利用保護者の年代は30代であるが、20代の利用者が増えていることも明らかとなった。利用保護者のほとんどが核家族世帯であり、「何かあった時にすぐに頼れる（近居している）親族がいない」の回答割合は前回調査結果と比較してさらに上昇している。

第二に、オープンスペースを知ったきっかけは、「友人・知人からの紹介」の回答割合がもっとも高いが、「インターネット」も高く、前回調査結果と比較して倍増していることが明らかとなった。

第三に、オープンスペースの利用理由として多く挙げられた項目は、「子どもが喜ぶから」の回答割合がもっとも高いが、次に挙げたのは「ストレス解消やリフレッシュできるから」であった。

第四に、子どもについての気がかり・心配ごとの第1位は「食事」であり、次いで「発達面」「からだの成長」、「性格・行動面」「トイレトレーニング」の割合が高いことが明らかとなった。

第五に、オープンスペースに対しては、9割以上の利用者が「満足」と回答した。

第六に、利用者自身については、「子どもに『ダメ』と制止する言葉が多くなってしまう」の回答割合がもっとも高く、次いで「子どもにイラっとすることがある」が高いことがわかった。さらに、利用保護者自身についての回答と「頼れる親族の有無」との関連をみたところ、頼れる親族の有無にかかわらず、利用保護者が悩みながら子育てをしていることが窺え、本学オープンスペースにおける第6回質問紙調査により、利用保護者への支援が一層必要であることが明らかになった。

平林・砂川ら（2016）は、子育て支援拠点事業の利用者について、その多くが専業主婦であることを踏まえると、拠点事業としてはまず専業主婦を中心としたニーズを組みつつ、地域の個別性を踏まえた支援が求められるとし、加えて、今後は産休・育休中の女性や、男性をサポートする視点を忘れないことが重要だと指摘した。実際、本オープンスペースの利用者の中には、産休・育休中の者や男性の姿も多く見られるようになってきた。これまであまり意識してこなかったこれら利用者のニーズの抽出も検討していきたい。

今後も保育アドバイザー、教員、学生との開かれた関係を保ちながら、利用保護者と子どもたちにとって安心できる環境、育児不安の軽減につながり、仲間づくりのできる場を提供できるよう努めていきたい。

謝辞

質問紙調査にご協力下さいましたオープンスペース利用者の皆様と、本事業に携わる保育アドバイザー、外部講師、事業を支えて下さる地域のサークルの皆様、そして、本学の教職員に厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 平林佳奈，砂川芽吹ら．（2016）．乳幼児の子をもつ母親に対する地域子育て支援の現状と課題．東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要，39, 34-41.
- 角張慶子，小池由佳．（2013）．「子育て支援」が親に与える影響について：「親子の居場所」の利用による子育てにおける変化．人間生活学研究，4, 41-50.
- NPO法人子育てひろば全国連絡協議会．（2017）．地域子育て支援拠点事業における活動の指標「ガイドライン」（改訂版）http://kosodatehiroba.com/new_files/pdf/guide29.pdf 平成30年12月6日AM10時15分閲覧